

# 心理学は 「性格の検査とカウンセリング」 だけではありません

古川 聡 先生



古川 聡 (ふるかわ さとし)

東京都生まれ。横浜国立大学教育学部卒業。筑波大学大学院心理学研究科博士課程単位取得満期退学。筑波大学助手、星薬科大学薬学部専任講師を経て、2001年より国立音楽大学専任講師、2004年より助教授。現在准教授。学術博士(筑波大学)。主な著書『こころの探検』(丸善、単著)、『脳とこころの不思議な関係』(川島書店、共著)、『教職に活かす教育心理』(福村出版、編著)、『ふれあいの心理学』(福村出版、編著)、『クイズと体験でわかる心理学』(福村出版、共著)。主な翻訳書『ほんどうのウソの本』(丸善、監訳)、『ヘルスケアのためのコミュニケーション』(廣川書店、共訳)、『頭の働きを科学する』(マクロウヒル出版、共訳)。

高校時代、ご自分の筆跡に興味を持たれたことから、心理学の世界に漕ぎ出した先生。今日はその事始めをお聞きしました。

## クラブに熱中

— 先生のお生まれは？

古川 東京ですけど、育ったのは千葉県です。小学校までは船橋で、中学からまた東京の両国ですね。

— 子ども時代の音楽との関わりは？

古川 姉がやっていたので、私も3年ぐらいオルガンをやっていたのですが、もう弾けませんね。楽譜はどうにか読めるのですが、右と左、違うと指が動かなくなる(笑)。

— 中学でブラスバンドに入られたそうですね。

古川 何となく音がしている部屋に行ってしまっただけです。それで、たまたま「クラリネットが人数足

りないからお前やれ」と言われて3年間没頭してしまいました。

— はじめから音は出たのですか？

古川 音は出たんですけど、なかなか上手にならなくて。クラリネットのちゃんとした先輩が卒業して、教えてくれる人がいなくなっただけです。それで、自分で見よう見まねでやっただけで、上達しないんです。きちんと教わってあげれば、もう少し人生変わったのかもしれないですけど、自己流でずっときちゃいましたから。

— 高校でも続けられましたか？

古川 自分ができるものは何かと考えた時に、運動は無理、絵はだめで、もうオーケストラしかなくて、ブルズルと。

勧誘の時、「楽器は何？」。「クラリネットが一本足りないからお前やれ」。それで新人生歓迎会の時の《未完成》と一緒にやらされたのですね。

— 新入生なのに、舞台上に立たれたのですか？

古川 ええ、自分の歓迎のために。入学後もみんなは勉強しているのに、私は朝から音楽室にいました。

— 自主的にですか？

古川 何しろ先輩と合わせなければいけなくて、その練習に朝と夕方行っていました。勉強なんか全

然でした（笑）。

― 勉強以外に好きなことがあるのは大事だと思いますが。

古川 バランスですね。大抵はどつちかに偏つちやうと思うのですが、今になって考えれば勉強に偏らなくてよかつたなという気がします。

― 上級生になると、先生が中心になつて教えたり、指揮、編曲をされたのですか？

古川 恥ずかしながらやつたのです。自己流でやってきたにもかかわらず、部長になつちやいまして、指揮をさせられたことがあるのですが、歌は歌えないし、リズム感もそんなによくないと思うので、かなり苦労しましたが（笑）。

同級生の中で管楽器の男が3人いて、私がクラリネット、埼玉大学へ行つたフルート、東大へ行つたオーボエで、年中くつついて仲良くワイワイやっていました。

― それがないと、クラブも、音もとまらないですね。

古川 そうですね。合わせるといふのがいい経験だつたと思います。

## 心理学の道へ

― 先生は、一浪されていますが、現役と浪人の時とは、目指す学部は、

違つたのですか？

古川 最初は、地理学科に行きたかつたのです。ところが理科系になるので私は苦手。じゃ、どうしようかと考えた時に、心理学。というの、私の字は非常に読みやすいと言われるのですが、筆圧が強くカタカタ音もするし、すぐ疲れ、おまけに次の紙まで写つているので友人とは随分違うなと思つたのです。図書館で筆跡について調べたら、『筆跡学入門』という本があつて、書いた人は心理学の人で、そんなことで人間の性格が分かるのかな、やつてみたいなと。

現役の時には、心理学の中の何をやりたいという具体的なイメージはなかつたです。それが浪人の時、病気で入院し医者いろいろな話を聞いて、心理学の中に臨床心理学というのがあるのを知りました。個人の特徴とか悩みとかを研究対象にすることができればいいなと思つて、大学に行きました。

― 横浜国立大学の教育学部小学校教員養成課程ですね。教員になるというお気持ちは？

古川 全然なかつたです。私の時代は一期校、二期校がありました。二期校の中で心理学ができて東京から離れずに、遊べてちよつとおしゃれな大学を探しました。それ

に筆跡の本を読んだ時に、著者が横浜国立大学の先生だつたんです。それで行つてもいいかなと思つて。

― 大学生活はいかがでしたか？

古川 心理学は人間対象の学問なので、お互いに実験をやるんです。1年の時は率先して被験者になつて、先輩たちの全部の実験をやりました。たとえば記憶の実験、単語や絵を覚えて、5分後にどれだけ思い出せるか。観察では、待ち合わせ相手が遅れた時に、待つている態度や、公衆電話のかけ方など、こういう研究にはこういう方法がある、こんなことが分かるんだというのを、いろいろと勉強しました。あれが私にとつて4年間が一番大きかつたと思います。

## 大学院で心身症に

― 動物実験をする生理心理学に進まれたのですね。

古川 はい。大学2年生の時に赴任してきた若い先生に可愛がつていただいて、入つちやつたんですね。動物実験をやりたいなんていうのは、34人の同級生の中では私1人。動物実験といつてもネズミしか使っていませんけど。

― 大学院は筑波大学ですね。古川 筑波に行つてみたところ、

自分が考えていたのと全然違いました。それで、大学院に入つて1か月半ぐらいで心身症になりましたよ（笑）。夕方になると、耳鳴りで聴こえなくなるんです。一応病院へ行きましたけど、原因は自分で分かつてますから。2、3週間過ぎたらもう何ともなかつたです。

― ご自分で治されたのですか？

古川 ここはこういう所だと割り切つたのでしようね。

研究室ごとのしきたりというか、雰囲気の違いがあるのですね。大学が横浜という遊びに囲まれた楽しいところだつたので、そこから周りに何もなく、勉強するしかないところに行つて、なじめなかつたんです。

それに、最初は筑波の学生がとても賢く見えたのです。だけど彼らは深くは知つているけど幅広く知らない。私は特に専門を持たず、4年間幅広く勉強し、現場で実験をしていたので、深くは知らないけど幅広く知つている。これなら、自分はやつていけると思つたのでしよう。

## 学部生の実験を指導

古川 教授は大学院生を指導し、大学院生は学部生を指導して



古川先生の著書～当館所蔵図書から。左から『こころの探検（請求記号●J98-831）』『教職に活かす教育心理（請求記号●J93-639）』『脳とこころの不思議な関係（請求記号●J98-924）』『ほんとうのウソの本（請求記号●J113-216）』『ふれあいの心理学（請求記号●J92-551）』

いました。それで毎年卒論を3人、4人と見ていました。実験も全部です。学生はほとんど下宿しているの、時間があうのはアルバイトが終わってから。私も用事があるので真夜中に一緒に実験をしたり、英語の論文を読んだりというのをしていました。もちろん自分の実験もするんですが、彼らの指導に時間をかなり取られました。それで自分がやっている研究の一

部を学生にやらせてみたり、興味があえばですが、新しいことを始める前に学生に先行してやらせてみたり、ということはしていました。中には全く違うテーマを持つてくる学生もいるので、こちらは負担ですが、それを負担と思うか、自分の守備範囲が広がったと思うかの違いじゃないですか。学生の実験で「妊娠したネズミにお酒を飲ませるとその子どもがどうなるか」というのもやりました。そのため、私自身の実験は朝8時に大学へ行つて、午前中に行っていました。

## 大学院時代の実験

— 大学院時代の実験テーマは？

古川 心理学の中には、記憶の研究もあつて、私も大学院の時にやっていたのですが、これからは記憶障害を軽減する薬というのがとても大事なのです。その薬を作るにはどうすればいいのかといった時に、若いネズミを使って、脳の一部を壊して痴呆状態を作り、新しく作った薬を飲むと痴呆状態が改善すれば、それは認知症に効く可能性がりますよね。それで、製薬会社がいっぱい作っていました。その他に、生まれてから

2年ぐらいたった老齢のネズミに何かやらせたら、若いネズミと比べて成績が低かった、その老齢ネズミに薬を投与したら記憶が回復したというのが一番いいわけですね。これはクリアに出ないので、そんなことをやっていました。

— まさに時代の最先端の実験をされていたんですね。

古川 もう20年以上も前ですね。究極の目標は、普通の人の知能を高める、頭を良くする薬なのですが、これはとても難しいですね。

— それは欲しいですね（笑）。

古川 もしかしたら、私は今頃製薬会社に勤めていかも知れません。大学院の途中で、何人も製薬会社に行っています。私にも就職の話がありましたから。でも自分には向かないと思つたので行きませんでした。

認知症の薬を開発する時に、やはり心理学の実験的な手法が必要なのです。頭の良いとはどういうことかといったら、簡単に定義するのは難しいですよ。頭の良さを調べる方法といったら、これは心理学なのです。それで、動物実験、生理心理学をやっている者が、主だった製薬会社に大体1人はいると思うのです。

— 薬科大学での講義をまとめた著作

『ふれあいの心理学』に、患者さんの立場に立つことか、医療従事者のストレスに関わることが書かれています。たが。

古川 患者の家族を支えるというところが他の本にはないですね。これが一番大事かなと思つていたのです。心理学は細かい理論も必要だけれども、もう少し違う視点からも書きたいと思つたので、患者の家族を取り上げました。ただ、これ売れなかつたんですよ（笑）。売れないので、初版で終わってます。

## 心理学とは

— 心理学とはどんな学問と思われませんか？

古川 実験室の中だけの心理学ではだめです。心理学の研究対象は人間が中心だと思えますから、世の中の人間にもっと積極的にアプローチしていかなければいけません。

医療で言えば、薬剤師は薬しか考えていなかったわけです。薬を開発すれば病気が治るだろうと。でも、薬を処方する、飲むというのは、やっぱり人が介在するわけですね。そういうところに目が行くこと、どうしても心理学的な視点が必要にならざるを得ない。医療に限らず、結局は人ですね。人が

何かして、それを発する人と受ける人がいて、ということを考えたら、いろいろなところのベースになる部分かなと思うのです。

学生に「心理学ってどういう学問？」と聞くと、「性格検査とカウンセリング」と答えます。それだけではなくて、いろいろあるんです。たとえば心地よい椅子の傾き具合とか軟らかさ、これも心理学です。安心する壁の色とか、洋服のデザイン、トイレトペーパーの幅、みんな心理学が関わっています。もつ日常生活の中で心理学が関わっているところを感じてもらえるようになれば、イメージが変わるかなと思います。

— 心理学を学ばれてよかったことは？

古川 玉川上水駅から大学までの歩道に、茶色と白の煉瓦がランダムに並べてありますね。でも、よく見ると違いますね。正門手前少し引つ込んだ入口を作りましたが、あそこに1箇所だけ7、8枚、白と茶が縦に並んでいる所があるんです。煉瓦職人さんの特徴というか、気質というか、傾向で、ランダムにしているはずなのですが、ランダムじゃないんですね。そういったところに目が行っちゃうんですよ。分析しようと思っただけ見るわけではないのですが、何か

見た時に、ちよつと普段と違うところがあつた時に、「おっ？」と思ったりしますね。

行きたい所がたくさんあつて

— 先生の趣味や、余暇の過ごし方を教えていただけますか。

古川 趣味になるのかな、元々地理をやったので、旅行地理検定の国内編と海外編を受けています。それは知識だけなので、現地に行つてみたい。イスラエルのエルサレムへ、イランのイスファハンでモスクを、アフリカのナミビアでナミブ砂漠を、ポルトガルのロカ岬で大西洋を見たいんです。通勤のバッグの中には旅行代理店のツアーのパンフレットが必ず5、6冊入っていますけどね（笑）。私、小学校の時にイランに行つてみたいと思つたらしく、イラン大使館にパンフレットを請求したんです。アラビア語は全然読めませんが、言葉も通じなければ文字も分からない中に自分を置いてみたいんです。どうなるかなと思つて。

国立の学生気質

— 先生が教えていらした他大学の学

生さんたちと、国立の学生さん、違いはありますか？

古川 やつぱり大学の雰囲気ってありますね。国立の学生さんは、いい意味で育ちがいい。感性が豊かなのでしょう。冗談を言つてもちゃんと笑います。私の話を比較的素直に受け止めてくれ、すぐ吸収する。その吸収力が違いますね。だから、それをもつともつと伸ばせばいいと思うのです。

— 最後に、学生さん達に先生から一言いただきたいのですが。

古川 私は大学の時に心理学以外のことをいっぱいやつたのです。友達を作ることが一番で、毎年旅行に行つたり、山に登つたり。

音楽大学だとしても音楽という尺度でやらなければいけない感じがありますね。だけど、音楽大学にいるからこそ、音楽以外のことをやってほしいなと思つています。教養科目の心理学でも、旅行でも、山登りでも、本を読んでもいいです。音楽ということだけでなくて、違う学問的なことを。それが将来の役に立つのではないかなと思いますね。

— 今日本当にありがとございました。

古川先生おすすめの本

『マンウオッチング 人間の行動学』デズモンド・モリス著、藤田統訳（請求記号●J16-110）

人間の何気ない動作をよく観察して見ると、そこにはその人の欲求や意思が隠されています。心理学をやっていると人の心がわかるのではないかと言われませんが、実は他者の動作をさりげなく観察して、その裏にあることを推測しているに過ぎないのです。この本を読んで、あなたも心理学者になりましょう。

『脳の探検 上・下』フロイド・E・ブルーム他著、久保田競訳（請求記号●J72-292~293）

このぼろろんと手に取つた時も、この欄を読んでる今も、脳は活発に働いています。脳が動いているからこそ、本を手に取ることも読むこともできます。そのような脳の動きを豊富な図を使ってわかりやすく説明してくれます。この本をさらに読みやすくしたのが拙著『脳とこころの不思議な関係』です。

『つだけに行つてみたい音楽のある景色』西岡詠美編（請求記号●J13-361）

音楽を聴くと、さまざまなる風景が頭をよぎります。この本では音楽にまつわる世界の55カ所の風景が美しい写真で紹介されています。その土地に行つて、そこでの音楽を聴きたいと思つています。

●かわた あつこ 心理学って年齢と共に理解が深まるように思います。本を読んでもなるほどと…。もっと早く理解できていれば人生変わったかもしれません。